



2007年11月、千葉県立八千代東高校の塩澤和博さん(左)らは、埼玉県の国際フェアに参加し、ベトナムの文化や習慣などについて紹介した

世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



第10回

日本の子どもたちに伝えたいこと

教師海外研修 in ベトナム(後編)

昨夏、埼玉、千葉、山梨県の教員が参加したベトナム教師海外研修。教員自身が現地で見えて、感じて、考えたことは、帰国後、授業でどのように生かされているのだろうか。それぞれの取り組みを追った。(ベトナムでの研修の様相を紹介した前編は1月号を参照)

JICAホームページ (<http://www.jica.go.jp/icapark/monthly/index.html>)でも閲覧可能



写真を見ながら、授業の構想を立てる内田さん(左)、教員それぞれがベトナムで撮影した写真は、ウェブサイトで管理され、参加者全員が活用できるようにした

心に残ったものを伝える

「この写真で格差について伝えられないかな」「生徒に考えさせる授業をしたい」。3、4人ずつ、4つのグループに分かれた教員たちが、額を突き合わせてたくさん写真を見ている。

ここは埼玉県国際交流協会の一室。2007年8月下旬、ベトナム教師海外研修1の報告会(埼玉県)が行われ、研修に参加した埼玉県の教員4人をはじめ、開発教育に取り組む教員やNGO職員などが集まった。4人は現地で見つけたことを報告し、参加者とともにその経験を今後の授業でどう生かすかについて話し合っていた。

題材として特に注目されたのが、水上生活者の写真。水上生活者とは、観光都市フエ市の中心を流れる川の上で生活する同市最大の貧困層で、川の水を使った不衛生な生活、高い失業率、低就学率など多くの問題を抱えている。そんな人々の家を訪問した教員た

ちは、貧困の現実を目の当たりにしショックを受ける。しかし、貧しくとも素直で屈託のない笑顔を見せる子どもや彼らの生活向上を支援する青年海外協力隊の藤林似那さんと澤井美貴子さんに出会い、希望を見いだし、「ここで感じたものを伝えたい」と考えたのだ。

「本当の幸せって何?」

埼玉だけでなく、千葉、山梨の報告会にも参加した埼玉県久喜市立久喜中学校の内田十詩哉さんは、「子どもたちの笑顔を通して、幸せについて考える授業をしたい」と言う千葉県木更津市立木更津第二中学校の西克夫さんからヒントを得て、水上生活者の子どもが笑っている写真やビデオを活用し、ベトナムで見つけたことをクイズ形式で紹介する「ベトナム×クイズ」など、生徒が楽しみながらベトナムについて知る授業を行った。

「子どもたちの目がすごくきれい」と写真を見つめる生徒たち。内田さんから、使い捨てのビニール袋を集めて換金したり、ビーズのアクセサリーを作って販売し、細々と生計を立てる水上生活者の現実

を知らされ驚く生徒もいた。だが、輝く笑顔が印象に残ったようで「貧しいからって不幸なわけじゃないのかも」「日本の中学生より幸せそう」といった感想を述べていた。

「発展を遂げた日本の社会は物質的には豊かかもしれないが、目標を見つければ自分を見失ってしまっている生徒は少なくない。前向きに生きる人々の素朴な姿の素晴らしさを伝えたい(内田さん)」

また、研修に参加した教員と埼玉県の国際協力イベント「国際フェア」に出展して、ベトナムの文化などを紹介するとともに水上生活者の子どもたちが作ったビーズのアクセサリーを販売した。そのほか、JICAの国際協力出前講座²を利用して元隊員を学校に招い

て授業を実施するなど、他校の教員やJICA関係者とのネットワークを広げ、子どもたちや地域住民の国際協力への関心の向上に努めている。

「人」を感じる授業を

一方、緑豊かな山中にある山梨県都留市立都留第二中学校の渡邊功資さんは、2年生の総合的な学習の時間や道徳、社会科の時間などで、07年12月から6回にわたってベトナムに関する授業を行っている。約20年前から、社会科の教員として、生徒が主体となって平和について考える授業に取り組んできた渡邊さん。その中で常にこだわっているのは、学ぶ事象一つ一つに「人」を感じさせることだ。ベトナム

を題材にした授業の2回目でも、プラモデルの空箱を大事そうに抱える水上生活者の少年の写真を取り、少年が何をしているか、何を思っているのかなどを考え、一人の少年の状況をじっくり想像させた。一人一人の目を見ながら、次々に質問を投げ掛ける渡邊さんの声に、生徒たちは目を傾け、イメージを膨らませる。「プラモデルを欲しがっ

ている」「空箱の絵を見せようとしている」など、生徒の意見を聞いた渡邊さんは、水上生活者の厳しい生活を説明した。

そして、この授業の最後に、渡邊さんは「自分がドラえもんなら水上生活者の未来のために何を出しますか?」と問う。しばし考え込んだ生徒たちは紙に「じょうぶな家」「格差のない社会」などをつづり、ある女生徒は「普段私たちが捨てているものを宝と想っている人がいると知った。この格差をなくしていきける社会をつくりたい」という言葉を残した。

渡邊さんは、2月までに授業の続きを行い、ベトナムの貧困が日本人の生活と無関係ではなく、だからこそ「遠い国の見えない人々のことまで考えられる想像力豊かな人間になってほしい」と伝えるつもりだ。

ベトナム教師海外研修に参加した教員らはそれぞれ、現地の経験を生かして国際理解教育・開発教育の授業を行っている。その授業を受けた生徒たちは、地球上のさまざまな課題や途上国の現状を理解し、一人一人に求められる役割を考え、活動する一歩を踏み出そうとしている。



ベトナム語に訳された漫画『ドラえもん』を見せる渡邊さん。身近な話題から生徒の関心を引き付け、貧困などの重いテーマについてしっかりと考えさせた

1 学校教員が開発途上国の社会・教育事情やJICAの活動などを視察し、その経験を日本の教育現場に還元することが目的。
2 開発途上国の実情を知り、国際協力の必要性を理解してもらうため、元青年海外協力隊やJICA専門家などを講師として学校などに派遣し、途上国での経験を生かした国際理解教育・開発教育を行う。

3月に授業実践報告会を開催!

今年3月、ベトナム教師海外研修を含む2007年度の研修に参加した1都6県の教員らによる授業実践報告会が開かれる。研修後に実践した授業を報告するほか、今後、研修の成果を生かしてできることなどについて話し合う。

日時: 3月2日(日)
会場・問い合わせ: JICA地球ひろば(東京都渋谷区広尾4-2-24)
TEL: 03-3400-7713 URL: <http://www.jica.go.jp/hiroba>